

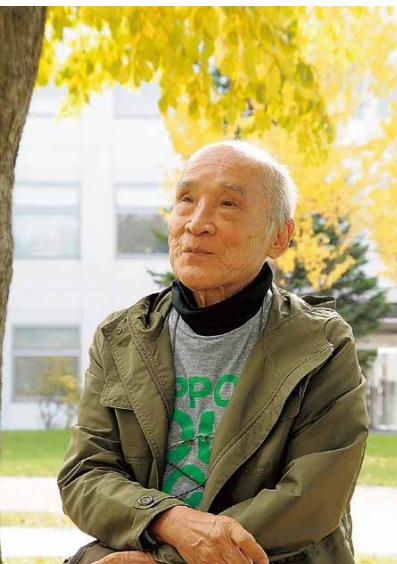
HOKUSEI@COM

2013・NOVEMBER

vol.16

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE AUTUMN EDITION

北星学園大学 北星学園大学短期大学部



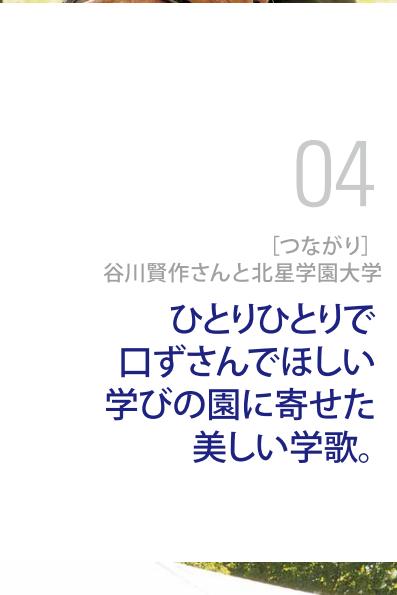
02-03

[特集]
詩人
谷川 俊太郎さん
インタビュー



02-03

言葉は地下から
湧き上がり、
こころは
宇宙を浮遊する。
詩人
谷川 俊太郎さん



04

[つながり]
谷川賢作さんと北星学園大学

ひとりひとりで
口ずさんでほしい
学びの園に寄せた
美しい学歌。



05

[OB&OG インタビュー]
卒業生は、いま。

北海道総務部 職員監
赤塚 善彦さん

苦しみをバネに
自らを鍛える。
大切なことは、
みんな山から教わった。



06-07

[学生たちの素顔]
北星フェアトレード

買う楽しみが、
途上国之力になる。



08

[先生たちのその素顔]
短期大学部 川部 大輔先生
コミュニケーションを
創造する、
デザインのチカラ。



[特集] INTERVIEW

詩人 谷川俊太郎さんインタビュー

言葉は地下から 湧き上がり、 こころは 宇宙を浮遊する。

現代詩壇を代表する詩人・谷川俊太郎さん。

じつは、北星学園大学とは開学30周年を記念して
学歌を作詞していただいたご縁があります。
去る10月、「朗読と音楽のコンサート」のため
来札された谷川さんを本学にお招きし、
学生インタビューが実現しました。



はら こ あきほ
原子 明歩
経済学部 経済学科4年



いけ だ まい
池田 麻衣
文学部 心理・応用コミュニケーション学科4年
宇宙への思いや、詩の創作スタイルなど、谷川
さんの頭の中を少し知ることができて感激しま
した。コンサートでは音を楽しみながら日本語の
魅力を再発見し、もっと多くの谷川さんの詩に
触れてみたいと感じました。

北星学園大学の学歌を作詞。

原子：本学は1991年に開学30周年を迎えた際、谷川さんに学歌を作詞していただきました。当時のエピソードなどについてお聞かせください。

谷川：詩人で当時英文学科の教授だった矢口以文さんから依頼を受けたと記憶しています。息子の賢作が学歌の作曲を手がけて間もない頃でしたが、今あらためて聞くと、学歌らしい良い歌だなと思いました。

池田：歌詞に「宇宙へと響け歌ごえ」とあります、アニメ『鉄腕アトム』の主題歌や詩『二十億光年の孤独』など、谷川さんの作品には宇宙に関する表現が多く登場しますね。

谷川：十代の後半から自分の住所は宇宙だと思っていたんです。一般的な住所も範囲を広げれば日本的一部だし、アジアの一部、地球の一部と視点を広げていくと結局宇宙に行き着いてしまう。天文学の知識はありませんけれど、宇宙は身近な環境だと思っていました。僕はひとり子で親しい友達も少なく、人間関係における孤独はあまり感じなかつたけれど、宇宙の中ではひとりぼっちなんだという感覚が『二十億光年の孤独』の根底にはありました。

池田：本学の教育理念であるキリスト教主義を反映した「祈り」という言葉や、創立者サラ・C・スミスが札幌に持ち込んだとする「ライラック」が歌詞に盛り込まれるなど、北星らしさを感じさせる表現も印象的です。

谷川：学歌を作る上では具体的な校風やシンボルを意識しますが、もともと僕はライラックが好きですね。庭に植えたかったけど「東京では根付かない」と植木屋さんに断られて残念な思いをしたこともあります。また、母が同志社大学出身で僕もキリスト教の幼稚園へ通っていたので、キリスト教

PROFILE

谷川 俊太郎

1931年、東京生まれ。都立豊多摩高校卒。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』出版。以後詩、エッセー、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。詩集に『21』『落首九十九』『ことはあそびうた』『定義』『みみをすます』『日々の地図』『はだか』『世間知ラズ』『minimal』など、エッセー集に『散文』『ひとり暮らし』、絵本に『わたし』『ともだち』『もともこもこ』などがある。谷川賢作との共演も多く、CD『クレーの天使』『家族の肖像』などが出ている。近刊は『私』『詩の本』『トロムソカラー』『ばくはばく』『写真』など。





には親しみがありましたね。幼稚園の時、赤と青の秤を持った天使の絵を見て「秤が赤に傾くと地獄へ行く」と聞いて、幼心にすごく印象に残っているなあ。

湧き上がる言葉をどう伝えるか。

池田：谷川さんは60年以上もの間、創作活動を続けていらっしゃいますが、どんなふうに詩を書かれるのでしょうか？

谷川：散文は左脳で書くけれど、詩は右脳で書くもの。まず自分をからっぽにして待ちます。潜在意識の中にある言葉にならない何かが、思いがけない言葉になってポコッと出てくるまで、何時間でも待ちます。「インスピレーション」は天から降りてくるイメージだけど、僕の場合は言葉が地下水のように湧いてくる。それを書き留めて毎日見直して、使えそうな言葉を組み合わせたり、手直したり、一作品を仕上げるのにひと月以上はかけます。

原子：原稿用紙に書かれるのですか？

谷川：今はパソコンです。字が下手だし、万年筆はインクが擦れて汚れるのが嫌なので、ワープロが出た時はすぐに買いました。最近はノートパソコンを持ち歩いていて、旅先で書くこともあります。



池田：書くツールが変わったことで詩作に変化はありますか？

谷川：ありますね。原稿用紙は20字×20行。1フレーズが行をまたぐと美しくないので20文字以内に収めていたけれど、ワープロやパソコンになってからは息の長い詩が書けるようになり、口調も変化しました。推敲もしやすくなって、手直しに時間をかけるようになりました。

原子：谷川さんの詩が読めるスマートフォンアプリが登場するなど、メディアも変化していますね。

谷川：詩を読者に届ける方法は紙だけではありません。僕は若い頃から映画やアート、音楽とのコラボレーションにも取り組み、時代に合った発信方法を考えました。詩の読者が激減する今、電子メディアを活用した詩の発信は、ますます重要になっていくんだろうと思います。僕はもともと真空管ラジオを作るのが好きだったこともあり、今も電子メディアに興味があるんですよ。

ただ、ツイッターやフェイスブックなど不特定多数とのやり取りは疲れちゃうので、ネット上ではホームページを介して読者のみなさんとつながっています。

谷川作品を「感じる」ということ。

原子：東京・森アーツセンターギャラリーで「ヌヌーピー展」を開催中ですが（2014年1月5日まで）、『ピーナッツ』の翻訳も谷川さんが手がけていらっしゃったと知って驚きました。

谷川：1967年頃、知り合いの出版社社長がアメリカで翻訳権を取ってきたのがきっかけで、2000年に原作者のシュルツ氏が亡くなるまで翻訳し続けました。アメリカを旅したときに新聞で見て「変な犬がいるな」と興味を持っていたので、翻訳はとても楽しかったですね。でも3ヵ月分のマンガがいっぺんに届くので、旅行に行くときは大変。徹夜で訳したこともしばしばありました。

池田：キャラクターたちのセリフは短いけれど、心に響くものが多いですね。

谷川：シュルツ氏に一度お会いしたことがあります、哲学者のように真面目で思慮深い方でした。日本語にない表現も多いんですね。当時はハロウィンの習慣が日本になく、ライナスの心の中にいる「かぼちゃ大王」は実在すると思い込み、悩みながら文献を調べたりしたのもいい思い出です。

原子：谷川さんは子どものための絵本も多く書かれていますね。私も『にじいろのさかな』『もこもこもこ』などを読んで育ちました。

谷川：絵本は子どもが喜んでくれるのが一番。詩もそうですが、僕は自分が書くものにメッセージを込めることはできません。メッセージが見えてしまう作品はつまらない。だから伝えたい思いは奥の方に隠して、いかに楽しく洗練された表現を書くかに心を碎きます。だから僕の作品は、その人が感じたように受け取ってもらわなければいい。そして、奥に隠れた微妙で味わい深い何かをくみ取ってもらわなければうれしいですね。

原子・池田：本日はありがとうございました。





谷川賢作さんと北星学園大学



ひとりひとりで口ずさんでほしい 学びの園に寄せた美しい学歌。

北星学園大学学歌は、父・谷川俊太郎さんの歌詞に作曲家でピアニストの谷川賢作さんが作曲された親子合作です。2012年に北星学園大学開学50周年・北星学園創立125周年を記念して制作した記念盤CDにも、本学チャペルゆかりの演奏家による演奏や新旧パイプオルガンの音色とともに学歌が収められました。このCDの制作を担当した経済学部・勝村務准教授が、賢作さんにお話を伺いました。

—学歌を手がけられた当時のエピソードをお聞かせください。

数多くの校歌を作曲していますが、北星学園大学の学歌はとびきりお気に入りの3作品の1つで、作ったときのことともよく覚えています。大学の校歌を作曲するのは初めてで、はりきっていました。通常、校歌はCやGといった簡単でとっつきやすい調で作曲することが多いのですが、北星の学歌はおもいきって少し高めのA♭という調を選びました。半音違うだけでも、かなり音の色合いは変わります。この調性での展開に、自分でも驚くくらいスムースにメロディーが出来きました。1番と2番とでメロディーの運びを少し変えてみたり、ジャズ的な和声を使ってみたり、若き日の実験がうまくいったと自負しています。

—学歌の楽譜については、CD制作の折、お世話になりました。

作曲当時はジャズの影響を強く受けている頃でしたし、大学だから伴奏も自由に弾いてもらえば、と楽譜には旋律(歌と前奏・間奏)とコードのみを記しました。そして作曲後20年を経て、開学50周年記念CDを制作されていた勝村先生から「学内に旋律も異なる数種類の楽譜が存在している」との問い合わせをいただいたのがきっかけで、こうして再びご縁を結ぶことができました。これを機に、この曲のサウンドをよく楽しんでもらうことのできるピアノ伴奏譜をあらためて自作したいと思っているところです。

—記念CDをお聴きになったご感想をお聞かせください。

北星学園女子高等学校音楽科のみなさんの清冽な歌声はもちろん、クァルテット・エクセルシオのみなさんの弦楽四重奏の伴奏も美しかったですね。平均律ではない弦楽ゆえにこの曲のサウンドの妙がよく發揮されるという新鮮な発見がありました。

現在、私のピアノと女声ボーカル、ベースまたはリコーダーの3人で活動しているユニット「DiVa」では、谷川俊太郎をはじめ現代詩人の詩をソロで歌っています。そんなふうに北星の学歌も、合唱だけでなくひとりでも口ずさんで親しんでほしいですね。男声で歌うこの曲も聴いてみたいですね。今回あらためてキャンパスを訪れて、いつか北星のチャペルでみなさんとともに学歌を演奏してみたいと思いました。

PROFILE



たに かわ けん さく
谷川 賢作

1960年東京生まれ。ジャズピアノを佐藤允彦に師事。演奏家としての活動とともに80年代半ばより作・編曲の仕事も開始。映画や舞台の音楽制作や演奏家への曲の提供などを多数手がけ、日本アカデミー賞優秀音楽賞を3度にわたり受賞。最新刊「歌に恋して 谷川俊太郎 & 賢作ソングブック」(音楽之友社)、谷川俊太郎をはじめさまざまな詩人の詩を歌うグループ「DiVa」の最新CD「うたがうまれる」(TRBR-0016)を今年7月にリリース。

北星学園大学 学歌

問いかける心は祈りにも似て
石狩の地平のかなた 限りない世界を目指す
ライラックの香りよみがえるたびに
新しく希望は生まれる
ああ北星 大空の深みに高く

青春のいのちは泉にも似て
湧き上がり燐めきあふれ 文明の渴きをいやす
ライラックの枝をそよがせる風に
明日への愛をはぐくむ
ああ北星 宇宙へと響け歌ごえ

※下記URLより学歌を聞くことができます。
<http://www.hokusei.ac.jp/information/song.html>



北星学園大学開学50周年・
北星学園創立125周年記念CD
「世にあって星のように輝く Shine like Stars」



[聞き手]
経済学部
勝村 務 准教授

谷川俊太郎さんも賢作さんも大学には通われませんでしたが、俊太郎さんの父上の徹三さんは法政大学総長も務められた哲学者でした。北星の学歌の歌詞と曲には「若人の集う学究の府」としての大学に対するお二人ならではの思いが寄せられているのを感じます。キーがやや高めという北星の学歌、女声には難しい部分もあるにもかかわらず、見事な歌唱を記念CDに収めてくれた北星女子高音楽科の生徒のみなさんにおあらためて感謝します。

OB & OG Interview

卒業生は、いま。

苦しみをバネに自らを鍛える。 大切なことは、みんな山から教わった。



北海道庁幹部職員として道政を支える赤塚さん。本学在学中は日高山脈の沢の難所を泳いで登るなどワンダーフォーゲル部員として登山活動に没頭していました。時代とともにその活動内容も変化しつつある同部にも「存続してくれることがうれしい」と目を細める赤塚さんに、学生時代や現在のお仕事について伺いました。



仲間とともに山へ挑み、
絆を育んだ4年間。

北星学園男子高等学校(現・北星学園大学附属高等学校)在学中から山岳部に所属し、大学ではワンダーフォーゲル部で本格的な登山活動に明け暮れていました。日高山脈の岩山をザイル^{※1}やハーケン^{※2}でよじ登りながら縦走したり、地図の場所もはっきりしないような険しい沢の難所を泳いで登るなど、北海道の自然の中でさまざまな冒険に挑んできました。ワンダーフォーゲル部の活動は入山から下山まですべて自己責任。自分の実力を見きわめ、危機管理に万全を尽くして最後までやり遂げる過程、また苦しさをバネに気力を振り絞る経験は、心身を強く鍛えるとともに、社会で業務を遂行する上でも随所に活かされていると思います。北海道府にも北星ワンダーフォーゲル部OBがいて、今でも業務終了後に集まって山登りの計画を立てたり、休日にバーベキューをするなど、良い関係が続いている。北星の自由な校風の中で仲間との絆を育み、チャレンジ精神を伸ばすことができた学生時代は、とても幸せだったと思います。

※1ザイル 登山用の綱
※2ハーケン 岸壁や氷壁を登攀する際、岩の割れ目や氷に打ち込む金属製のくさび。

危機対策から労務管理まで、
世のためになる仕事を。

大学卒業後は、北星学園男子高等学校で非常勤講師を務めたのち道庁へ。会計、総務、人事と管理部門を長く担当し、2011年に危機対策局長に任命されました。道内のあらゆる災害に関する情報管理や防災計画の策定、また東日本大震災後の1年間は、太平洋沿岸の津波浸水予測図の作成や道議会の質問答弁などもあり、寝袋を持ち込んで連日泊まり込みで業務にあたりました。ハードではあるけれど、道民の命を守る手応えを実感できる充実した毎日でした。現在は総務部職員監として、円滑な労務管理に向けた職員団体との調整などにあたっています。入庁当時、管理業務は苦手だと思っていたが、苦手な業務に敢えて取り組んできたことも成長の糧になっているかもしれません。

今年7月には元島民の方々とともに色丹島へ出向き、ビザなし渡航での北方領土墓参にも同行。荒地の草を刈って墓地を探し出し、慰霊祭を行いました。職員監の立場としては異例なのですが、元来山好きですから現場仕事が好きなんですね。これからも世のため道民のために尽力していくつもりです。定年を迎える数年後には、ボランティア活動もしたいですね。もちろん山にも登り続けますよ。本州や海外の山にも挑戦したいと思っています。



職員監室に飾られていた写真は、1977年2月、大学3年生の時に登頂した芦別岳で撮影したお気に入りの1枚。



1978年、日高山脈南部のビリカヌブリでヌビナ川を渡る。当時大学4年生、専門的な登山用品も少なく、今思えば驚くほどの軽装備だったとか。



[北星フェアトレード]

買う楽しみが、途上国のチカラになる。

「フェアトレード」って知っていますか？発展途上国の製品を適正価格で購入することにより、そこで働く生産者の自立を支援する貿易のしくみです。本学でも学生と教員による国際協力団体「北星フェアトレード」が活動中。その中核として奮闘する3人の学生が、活動や途上国支援への思いについて語り合いました。



大学会館のスペースを使った展示&ワークショップ



経済学部 経済学科4年
たけうち はるか
竹内 晴香さん



経済学部 経済学科4年
ほりぐち れいま
堀口 怜真さん



経済学部 経済学科3年
かんの ゆうせい
菅野 祐世さん



フェアトレード商品の背景と魅力を知ってほしい

——フェアトレードに関心をもったきっかけは？

竹内:高校時代に見た『世界がもし100人の村だったら』というテレビ番組がきっかけです。大学に入學して基礎演習でフェアトレードを学び、北星フェアトレードに参加するようになりました。

堀口:私も高校時代からユニセフや国連の途上国支援活動に興味があり、大学では自ら支援活動をしたいと思って北星フェアトレードに参加しました。竹内さんともそこで知り合いました。

菅野:僕は高校3年の時に、本学の入学案内パンフレットで初めてフェアトレードを知りました。入学後、萱野先生のゼミでフェアトレード関連イベントの運営に参加し、そこで堀口さんたちと知り合って、今年から北星フェアトレードに加わりました。

堀口:ゼミと北星フェアトレードでは、異なる視点からフェアトレードを考える機会も多いですよね。

竹内:北星フェアトレードは、活動を通して世界における貧富の差が生じる理由を知ってもらい、物販などのイベントによってフェアトレードの普及を目指しています。一方ゼミでは、フェアトレードのメリットだけではなく、課題

や問題点などについても考るるので、自分たちの活動を客観的に捉えることができます。

菅野:フェアトレードは日本で普及にくいと言われていますが、北星フェアトレードとゼミの学びを通して、その理由が少しあわかった気がします。安くても品質も良い日本の製品に比べると、途上国の製品は割高なので、買ってくれるのはフェアトレードに関わる人が大半。興味がない人は、商品を手に取ることも少ないんですよ。



今年6月に大通公園で行われた「フェアトレードフェスタ2013 in さっぽろ」の模様



竹内：フェアトレードに興味を持つ人は「ボランティア」の視点で買ってくれるけど、それは本来の商業取引ではないんですね。ヨーロッパでは人気女優がフェアトレードブランドのデザインを手がけるなど、商品そのものの魅力が認知されています。日本でも、もっとフェアトレードのしくみや商品の良さを知ってもらいたいです。

堀口：ビーズのアクセサリーやフェルトのマスコットなど、可愛いデザインも多いくらいですね。革のコインケースや麻のバッグといった、丈夫で実用的なものも数多くあります。

竹内：コーヒーやオリーブオイル、チョコレートなどの食品もお勧めです。身近な商品でフェアトレードを知ってもらえるとうれしいです。

学内外でフェアトレードを拡げる企画を展開中

——北星フェアトレードの活動について教えてください。

菅野：メインは物販とイベント企画です。最近は大学会館2階で月2、3回、カフェや展示、ワークショップなども行っています。現在フェアトレードの食材と道産食材を組み合わせた新作メニューも試作中で、チョコレートブラウニーやコーヒーゼリーなどのレシピが生まれています。

竹内：ショップとの取引から発注、販売まで流通の流れを体験でき、フェアトレードを肌で学ぶ機会にもなっています。大学生協1階にも物販ブースを常設しているので、地域の皆さんにも気軽に足を運んでいただきたいですね。

堀口：さらに、毎年6月に大通公園で開催される「フェアトレードフェスタ」にも広報担当として参加し、ポスターやチラシ、パンフレットの制作・配布、協賛のお願いにあたっています。その場で企業の方々と交わることにより、学生同士の活動にはない経験をさせてもらっています。

菅野：今年は会場がテレビ塔下から西8丁目へ移転・拡大したうえ、「さっぽろ花フェスタ」と時期が重なったおかげで、多くの方に訪れていただきました。

竹内：私たちが企画したヘナタワーのワークショップにも、同世代の人たちが多く参加してくれたんですよ。

堀口：これからはクリスマスイベントの企画がスタートします。もともとはフェアトレード実習と北星フェアトレードが協働で取り組んできたイベントなのですが、北星らしさも活かせるので力が入ります。

菅野：こうした活動を楽しみながら、僕自身も企業のあり方について考えるようになりました。利益だけでなく、生産者や消費者を大切にする企業の商

品を選んでいきたいですね。もうすぐ就職活動が始まりますが、そういう企業で役に立ちたいと思っています。

堀口：将来は、開発途上国の人たちの役に立ちたいという強い思いがあります。公私ともに国際協力に関わり続け、日本の若い世代に途上国の現状を知るきっかけを提供していくなどの活動を通して貢献できたらと思っています。

竹内：大学での4年間は、まさにフェアトレード一色。社会に出ても、何らかの形でフェアトレードに関わり続けたいです。身近な途上国支援としてのフェアトレードを、多くの日本人に拡げていきたいと思っています。

学生とともに広げたい、国際協力の輪。

北星学園大学 経済学部 経済学科
菅野 智篤 教授



北星フェアトレードは2005年12月、バングラデシュの刺繍製作団体SDUWの作品を紹介・販売する活動からスタートしました。北星フェアトレードが恒常的なフェアトレード推進活動を主眼としているのに対して、ゼミはフェアトレードの概論・理論を学ぶ座学が中心です。北星フェアトレードとゼミ、そして実習と多様な場でフェアトレードに取り組む中で、理論から実践へ、実践から理論へといった往復により、深い学び・気づきも生まれます。自分たちで企画を立て、学内外の関係者と協力して責任を持ってイベントを実行する力を付けていく姿は実際に頼もしいですね。学生たちには、地域や国境を超えた人々と自分たちの日常生活とのつながりを学びとり、同じ地球上に住む一人の人間同志としての感覚を身に付けてほしいと願っています。

北星フェアトレードを介したネットワークは、他大学の学生や一般市民との間にも広がりつつあります。これからもフェアトレードの核心である“生産者との結びつき”を大切に、最も身近な国際協力であるフェアトレードの輪をますます広げていきたいですね。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●短期大学部 生活創造学科 川部 大輔先生 ●

コミュニケーションを創造する、
デザインのチカラ。



教壇に立つ傍ら、創作活動も継続中。

もともと油絵やマンガを描くのが好きで美術課程のある大学に進学。しかしアーティストとしての表現活動よりも、デザインを通してクライアントの思いを消費者に伝えるほうが向いていると思うようになりました。卒業後はグラフィックデザイナーとして印刷会社に勤務したのち独立。現在も本学で教壇に立つ傍ら自らの創作活動も続けており、毎年行われる札幌アートディレクターズクラブ(SADC)のコンペティションにも参加しています。オリジナル作品を制作するのは、教育・研究業務や夫婦で分担している家事・育児の合間となるので大変忙ただしいのですが、アイデアを考えたり手を動かしてモノを作るのが好きなので、続けることができています。アイデアに詰まったりもしますが……そんな時はあてもなくドライブをしながら頭の中を整理しています。そんなことで結構ひらめいたりするんです。

コミュニケーションツールとしてのデザイン。

私の授業は「絵が好きだから」と受講する学生が多いのですが、絵画とグラフィックデザインは全くの別物です。絵画の目的は自己表現なので、発表した時点で理解者が少なくとも成立しますが、デザインの目的は情報伝達。見た瞬間に、多くの人に理解・共感してもらえない意味がありません。情報を整理し再構成して、心に残るメッセージを発信するのがグラフィックデザインなのです。こうしたスキルは広告の仕事だけでなく、一般企業の通常業務や日常生活など、あらゆる場面で大いに役立ちます。学生の皆さんには、デザインを通して人と人をつなぐコミュニケーションのあり方を考え、実践する力を社会で活かしてほしいですね。

今の目標は“デザインの教科書”。

本学学生が手がけたデザインは、社会にも多数発信されています。2010年には学生が考案した札幌市電内吊り下げ式クーポンが札幌メディアアートフォーラム(SMF)の学生コンペティションでグランプリ&市民賞をダブル受賞。翌年試験運用されました。また、2011年「北方領土の日」ポスターコンテスト(北海道)では、本学学生の作品が学生の部最優秀賞を受賞。地元・厚別区でもフォトコンテストや冬まつりのポスターを制作させていただくなど、学生をどんどん社会での「実戦」に駆り出しています。これからも教員として、学生の成長と活躍を後押していきたいですね。そのために、学生の実践事例と私の知識やノウハウをひとつにまとめた“デザインの教科書”をいつか形にできればと思っています。



PROFILE

かわべだいすけ
川部 大輔

1974年小樽市生まれ。1996年北海道教育大学教育学部札幌校卒業。デザイナーとして印刷会社勤務後、2001年「アトリエ スwing」設立。2002年より北翔大学生涯学習システム学部芸術メディア学科、2007年より北海道教育大学教育学部札幌校で非常勤講師を務めたのち、2009年より北星学園大学短期大学部生活創造学科専任講師。

〈おもな受賞〉

第2回北のペーパーデザインコンテスト・実行委員会長賞、第1回札幌アートディレクターズクラブコンペティション入選、ほか入選歴多数

〈社会での活動〉

日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)会員
札幌メディア・アート・フォーラム(SMF)運営委員
札幌アートディレクターズクラブ(SADC)会員



マトリョシカのカレンダーは2011年札幌ADC入選作品。



川部セミの学生の作品。厚別区のイベント告知ポスターのほか、「北方領土の日」ポスターは2011年のコンテストで最優秀賞を受賞。